



グローバル化は国家間に 「平均化・フラット化・均等化」を誘発し 国単位では「格差拡大化」を生む

SAM日本チャプター理事・広島支部長
(株)ロジタント 代表取締役
吉田 祐起



前回号では、「格差を無くするという不毛の努力より、それへの生き方処方箋を提唱することがより急務であり、求められる課題だ」と結びました。格差社会はグローバル化のいわば「落とし子」です。日本のデフレには私独自の持論「南北平均化現象」を早くから指摘しています。つまり、北半球の概してリッチな国では賃金や物価は下がり、南半球のプアな国や地域ではそれらが上がる、という図式です。この経済理論(?)を裏づけした(と私が判断する)のが昨年出版された『フラット化する世界 The World is Flat (上下巻)』(Thomas L. Friedman著)です。一方、『要素価格均等化定理』(Heckscher-Ohlin theorem)もあります。「グローバル化の下では労働豊富国が労働集約財を輸出、資本集約財を輸入し、資本豊富国が資本集約財を輸出、労働集約財を輸入する。生産要素が国際間で全く移動しなくとも、賃金率や資本のレンタル率などの要素価格が両国間で均等化する」という経済学。「平均化=フラット化=均等化」と符合します。

格差問題に関して案外と見落とされていることがあります。それは、国家間では格差は少なくなる反面、一国単位・国内では格差が拡大する、ということです。IT産業を主軸にした経済発展は生産拠点のグローバル化の推進で、当該国双方の労働者のそれへの対応能力格差や空洞化による所得格差を招来します。先進諸国・発展途上国の区別無く、貧富の差(格差社会)が発生するのはこうした地下のマグマみたいな勢いで防ぎようは無いと考えるべきです。

「勝ち組み・負け組み」といった好ましくない表現が横行する背景には、過去半世紀に及んで定着してきた「一億総中流化意識」が崩壊した結果とみえます。つまり、戦前・戦中時代は「ボクん家は貧乏だから…」と割り切り、それなりの生活態度がありました。それが中流化したゆえに失せてしまい、所得が低いことを、あたかも負け犬になったと卑下してしまうことにあります。分不相応な願望ゆえの負け組み意識でそれはあるでしょう。普通車のマイカーから軽自動車へ。軽自動車からバイクへ。バイクから自転車へ、と分に応じた移動手段機器の選択肢も必要な時代です。隣の家にピアノがあるからボクん家も、といった右へ倣えの生活態度はとくに卒業したはずだと思うのですが…。

格差社会を嘆く前に、「分相応」の生活に甘んじて自分らしく生きる選択肢があっていいと思います。モノ中心からココロ重視へのシフトです。内閣府が1972年以来実施している「国民生活に関する世論調査」の「今後の生活で何に重きを置くか」に対する回答結果があります。戦後の高度成長期が続いた時代は「物の豊かさ」が「心の豊かさ」をたえず上回っていました。1973年の第一次オイルショックを境に逆転し、爾来、その差は拡大の一途を辿っています。デフレ直前で極端に広がりを見せています。「物欲の追求」への限界がうかがわれる中、せめて心の豊かさを求めていこう、とした傾向が顕著です。いいことです！ セーフティーネットの整備への配慮は欠かせませんが、安部総理が提唱する「美しい国日本」は案外と、貧しかった時代の日本人本来の良き国民性、すなわち、互いに労わる心、助け合う心、心の豊かさを大事にした生き方ではないかとさえ思うのです。